

大学生における自閉症のイメージに関する研究

河内哲也, 齊藤恵一, 河内なぎさ, 伊藤淳一

A Study of Images of Autism in University Students

Tetsuya KOCHI, Keiichi SAITO, Nagisa KOCHI, Jun-ichi ITO

要旨: 本研究では、大学生における自閉症のイメージの構造について調査した。調査は、大学生を対象者として、SD法による質問紙によって実施された。調査の結果、以下の点が明らかになった。1) 自閉症のイメージは、全体的にポジティブに捉えられており、また自閉症児者と共生するべきであるという判断であった。前者は、発達障害に関する情報を得る機会の多さが要因としてあげられ、後者は福祉の充実が要因として考えられた。2) 自閉症に対するイメージは、個人的な主観による判断と社会的な関係性による判断の2要因による構造であると予測された。個人的な主観による判断では、自閉症に関する記述的情報に基づいた解釈であり、社会的な関係性による判断では、自閉症児者の振る舞いにおける個人への影響に基づいた解釈であるとされた。

キーワード: 自閉症 イメージ SD法 因子分析

1. はじめに

自閉症は、社会的相互作用における質的障害、コミュニケーションにおける質的障害、行動、興味および活動の限定された反復的で常同的な様式の3つの症状からなる発達障害であり(American Psychiatric Association,1994)、先天的な脳の機能障害が原因であるとされる。特に、自閉症は、社会生活を営む上で重要とされる社会的相互作用と意思伝達に質的障害があることから、言語と非言語のコミュニケーション障害が基本的症状とされる。これらの症状は、自閉症が先天的な脳の機能障害であることを考えると、発達の進んだ段階においても、他者と社会的接触を求めても、他者と相互的に反応することや、他者に共感する能力の障害は持続するといえる。

こうした特徴をもつ自閉症児者は、コミュニケーションの円滑さを必要とする社会生活において、その営みがしばしば制限されると考えられる。コミュニケーションは人と人との相互的交流であることを考えると、自閉症児者が社会生活を円滑に営むためには、自閉症児者へのコミュニケーション支援(高橋,1997; 大井,2004)はもとより、地域社会を取り巻く人々の自閉症に対する理解と認識の向上が必要不可欠であるといえよう。

しかしながら、自閉症は誤った認識や理解をされることがしばしばみられる。自閉症

協会(2004)の調査では、自閉症の原因について正しく理解していたのは全体の 6 割に過ぎず、心の病 (23%), 遺伝 (5%), 親の育て方 (3%) と、誤った認識が全体の 3 割を占めた。特に、誤った認識は 20 歳代に多くみられた。また、60 歳代以上では、乳幼児期の不適切な教育が原因と考えている人が多かった。さらに、近年、障害と犯罪を関連づけた報道は、自閉症に対する誤ったイメージを拡大させる原因となっている。このように、自閉症に対する誤った認識や理解が地域社会に存在することは、社会的相互作用やコミュニケーションに関して質的な障害を持つ自閉症児者が社会生活を営む上で、大きな障害となりうることは容易に想像し得ることである。

さて、自閉症に対する認識や理解に関しては、様々な研究がなされている。田実(2007)によると、大学生の自閉症に対するイメージは、無理解に基づく偏見、積極的な関与、表面的な理解による誤解、の 3 つの構造からなるとしている。自閉症以外にも、知的障害者に限定した態度研究も数多い。たとえば、生川(1998)によると、知的障害者へのイメージは、自分との直接的な関わりがなく、理念的な概念に関しては好意的となり、一方で自分と直接的な関わりがある現実的な概念に関しては好意的ではないとしている。つまり、障害に関するイメージは、個人の直接的関与の有無に影響を受け、また誤った認識や理解から形成される。これらのことは、障害の一つである自閉症に関しても同様であると推測される。

本研究では、大学生に対して質問紙を用いて、自閉症のイメージに関する調査を実施し、自閉症は、どのようなイメージとして理解されているのか、またそれらはどのような構造であるかについて分析を行う。また、分析結果から、今後の自閉症の理解に関するあり方について検討する。

本研究は、自閉症児者の地域生活や社会参加の円滑化を図る上で、また自閉症の理解と認識を良い意味で深めていくための方略を探るために、大きな意義のある研究であろう。

2. 方法

2.1. 調査対象者と手続き

対象者は臨床心理学を専攻する大学生 58 名であった。調査は、大学の講義前に実施された。質問紙は講義前に対象者へ配布され、対象者は質問紙の内容を熟読した後、質問紙の記入、提出が求められた。

2.2. 自閉症イメージの測定

自閉症に対するイメージは、SD 法による質問紙によって測定された。質問項目は、松村・横川(2002)を参考に、自閉症を刺激概念とした 20 の感情を表す形容詞対から成り立っていた。それぞれの項目は、5 件法によって評価された。評価値は、ネガティブな側面からポジティブな側面へと 1 点から 5 点まで配点し、3 点が中点とされた。たとえば、「明るい-暗い」の項目では、自閉症のイメージが「非常」に明るいと感じれば、対象者は「5」に丸をつけることとなる。

3. 結果と考察

3.1. SD 法による自閉症に対するイメージの測定

SD 法による自閉症のイメージの結果について、形容詞対ごとに、最も良いイメージを 5 点、最も悪いイメージを 1 点として平均値を求めた(Figure 1, Table 1)。各項目の平均値を見ていると、中点 (3 点) を上回ったのが 15 項目で、下回ったのが 5 項目であった。平均値の高いものとしては、「共生すべき」が 4.16 点 ($SD=0.83$) で最も高く、次いで「個性あふれる」の 4.03 点 ($SD=0.90$)、「怖くない」の 3.50 点 ($SD=1.05$)、「優秀な」の 3.43 点 ($SD=0.73$) の順に高い得点を示した。また、平均値の低いものとしては、「手際よい」が 2.55 点 ($SD=0.78$) が最も低く、次いで「陽気な」の 2.81 点 ($SD=0.80$)、「おだやかな」の 2.90 点 ($SD=0.89$)、「明るい」2.91 点 ($SD=0.88$) の順に低い得点を示した。各項目の得点が中点の値である 3 よりも有意に高いか、あるいは低いかをみるために、項目ごとに平均値が 3 であるという仮説に基づいた t 検定 (片側検定) を行った。その結果、「共生すべき」「個性あふれる」「怖くない」「優秀な」「気の毒でない」「かわいらしい」「役に立つ」「安全な」「きれいな」、および「関わりたい」の 10 項目で中点 (3) よりも有意に高くなっていた (順に、 $t(57)=10.55$, $t(57)=8.78$, $t(57)=3.64$, $t(57)=4.51$, $t(57)=2.30$, $t(57)=2.96$, $t(57)=3.13$, $t(57)=2.17$, $t(57)=2.43$ および $t(57)=1.94$ で、それぞれ $p<.01$)。また、「手際よい」「陽気な」の 2 項目で中点 (3) よりも有意に低くなっていた (順に $t(57)=-4.40$, $t(57)=-1.79$ で、それぞれ $p<.01$)。それ以外の 8 項目については中点の値とは有意な差が見られなかった。

このように、全 20 項目のうち、中点の値 (3) よりも有意に低い得点を示したのが 2 項目のみであり、それ以外の項目については中点の値とは差がない (8 項目) か、むしろ有意に高い得点であった (10 項目) ことから、調査対象となった大学生には自閉症が

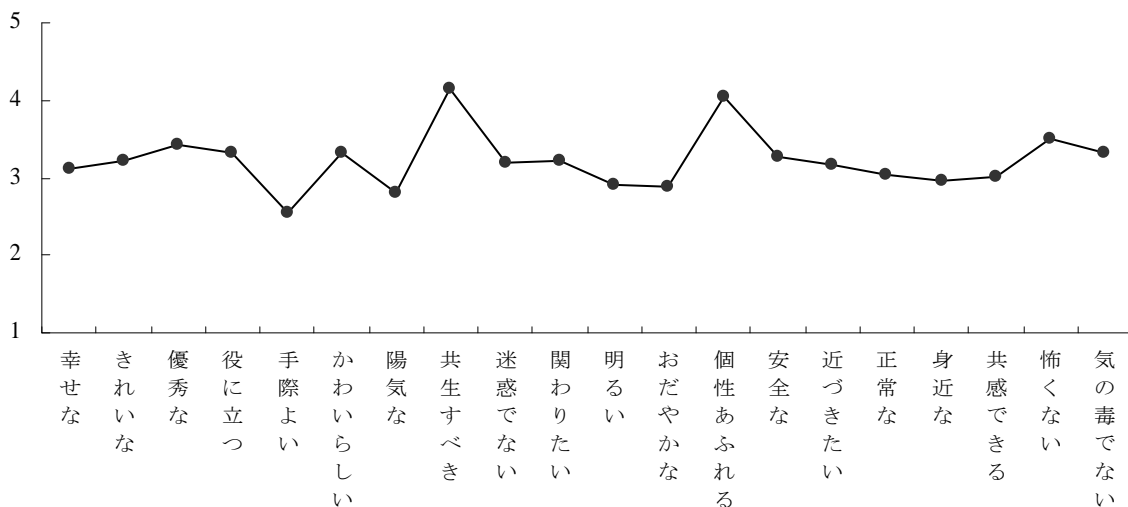


Figure 1. 自閉症イメージに関する項目ごとの平均値

Table 1
大学生における自閉症イメージの因子分析の結果

項目	平均値(SD)	第1因子	第2因子
第1因子:個人的な主観による判断			
近づきたい	3.16 (0.91)	0.82	0.11
関わりたい	3.22 (0.88)	0.79	0.14
明るい	2.91 (0.88)	0.73	-0.24
陽気な	2.81 (0.80)	0.70	-0.12
かわいらしい	3.31 (0.80)	0.70	-0.06
個性あふれる	4.03 (0.90)	0.64	-0.14
共生すべき	4.16 (0.83)	0.61	-0.03
共感できる	3.02 (0.96)	0.60	0.06
幸せな	3.10 (0.64)	0.48	0.32
気の毒でない	3.33 (1.08)	0.41	0.27
優秀な	3.43 (0.73)	0.38	0.30
身近な	2.97 (0.95)	0.36	0.22
第2因子:社会的な関係性による判断			
安全な	3.26 (0.91)	-0.36	1.06
怖くない	3.50 (1.05)	0.13	0.73
きれいな	3.22 (0.70)	0.05	0.65
迷惑でない	3.19 (0.87)	0.16	0.63
役に立つ	3.31 (0.75)	0.09	0.61
正常な	3.03 (0.94)	0.23	0.58
おだやかな	2.90 (0.89)	-0.17	0.43
手際よい	2.55 (0.78)	0.23	0.30

ポジティブに認識されていたと考えられる。これは、ほぼ同じ形容詞対を用いて行われた障害者のイメージに関する研究 (松村・横川, 2002)の結果とは異なるものであった。この研究では、臨床心理学や発達障害を専門とはしていない一般の大学生の持つ障害者イメージが否定的なものであったことが指摘されている。

この二つの研究において認識の違いをもたらした要因の一つは、手続き等が同等ではないので完全な比較はできないが、それぞれの対象者に与えられてきた情報の質的・量的な差によるものではないだろうか。本研究の対象者は臨床心理学および関連領域に関する情報に対して頻繁に接する環境にある一方、松村・横川 (2002) の対象者ではそうではなかった。近年、心理臨床領域にて発達障害に関連した話題が増加していることをうけ、大学の専門教育でも発達障害に関する講義の比重が高まっていることは容易に想像できる。このことから、発達障害の情報にふれる機会の多いことが、対象者の持つ自閉症に関するイメージをポジティブなものにしている大きな要因であると推測される。

各項目の平均値から、大学生は自閉症児者と社会生活の中で「共生すべき」であると認識していることが明らかになった。これは、松村・横川(2002)と合致する結果であった。この結果は、近年の日本社会において、福祉が充実し始めてきている背景を考えると、大学生の「共生すべき」と考える認識の高まりは容易に想像できる。

3.2. 自閉症のイメージの構造

大学生の自閉症に対するイメージの構造を明らかにするために、SD法による20の尺度について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。最尤法を用いて得られた各因子の固有値の結果から2因子構造が妥当であると考えられた。プロマックス回転後の因子分析結果をTable 1に示した。なお、「優秀な」「身近な」、および「手際よい」の各項目は因子負荷量が0.4未満であり、いずれも抽出された因子への関与の程度が低いと考え、考察の対象から除いた。

第1因子は、「明るい」「陽気な」「かわいらしい」等の項目、ならびに「近づきたい」「関わりたい」等の項目から成り立っていた。前者は自閉症および自閉症児者そのものに対して調査対象者が抱くイメージに関係する項目群、後者は自閉症と関与・接近したいという意志を反映する項目群であるといえる。ただし、Table 1にあるように、この因子では前者の項目群との関連がより強いと考えられるので、以降は第1因子を「個人的な主観による判断」と呼ぶことにする。

第2因子は、「怖くない」「きれいな」「迷惑でない」「役に立つ」等の項目から成り立っていた。これらの項目は、社会生活等の公的な事象における自閉症および自閉症児者に対する認識のあるべき姿を表しているといえるであろう。これは、第1因子を構成する主項目群において、対象者が抱く私的なイメージを反映したものであったことと好対照をなしている。以降、第2因子を「社会的な関係性による判断」と呼ぶことにする。

2因子構造を想定した因子分析の結果に対するこのような解釈は、参加者が少なく、それゆえ予備的・限定的であるものの、おおむね妥当であると考えられる。なぜなら、既に述べたように、自閉症および自閉症児者に対するイメージや認識に関連して、一方の因子は私的な側面を、他方の因子は公的な側面を反映するものとなっているからである。日常生活における事象のほとんどは、それらの見方や捉え方、認識の仕方において私的な側面と公的な側面が存在する。自閉症を含めた障害および障害者に対する認識も、また、同様であろう。上述の因子分析の結果は、まさにこのような性質を反映した結果であり、それゆえ、抽出された因子構造および各因子が持つ意味は安定的かつ一般的なものであるのではないだろうか。

以上の結果に基づき、以下では、自閉症の理解と認識を良い意味で深めていくためにはどのようなことが必要であるかを、因子ごとに検討する。

3.2.1. 個人的な主観による判断（第1因子）

第1因子における項目の平均値をみると、「陽気な」「明るい」は中点を下回っており、一方で、「共生すべき」「個性あふれる」は中点を大きく上回っている。前者はネガティブに判断されているといえ、後者はポジティブに判断されているといえる。自閉症および自閉症児者の症状や特徴は、奇妙な行動や会話が成立しづらい、こだわりが強い、習慣や環境が変わるのが苦手、表情や態度等の非言語的な相互的情緒交流の困難さがある等の記述で説明されることが多い。さらに、自閉症の症状と並列させて、日常生活における接し方の留意点や自閉症児者が地域生活にて過ごすべきであるという事実が記載さ

れていることが多い。これらの情報で自閉症が判断されると仮定すると、「明るい」「陽気」というイメージはポジティブよりは、むしろ、ネガティブな判断へ向かうと予測される。また、「共生すべき」「個性あふれる」というイメージは、むしろ、ポジティブな判断に向かうと予測される。このように、個人的な主観による側面からみると、自閉症および自閉症児者の理解や認識は、自閉症の各種記述情報によって判断されうると示唆できる。このことは、自閉症のイメージが、自閉症の各種情報における記述方法の善し悪しによって大きな影響を受けることを示しているといえる。また、自閉症に対する正しい理解や認識を生む方法の一つであると同時に、誤った理解や認識を生む要因でもあるといえよう。

3.2.2. 社会的な関係性による判断（第2因子）

第2因子は、「安全」「怖い」「きたない」「異常」などのイメージで構成されており、これらは社会生活にて自閉症と関係を構築する上で、自身に直接的な影響を受けうるであろう感情であると解釈できる。言い換えれば、社会生活などの公的な事象において自閉症児者に関与した場合の判断指標であるといえるであろう。

これらは、自閉症のイメージが、単に自閉症の症状や特徴に関する記述情報のみで判断されるのではなく、それら情報をふまえて、自閉症児者の生活様式や対人交流等、社会的関係性の構築についても関連づけて判断されていることを示している。以上のことから、次のようなことが推察される。

社会的な関係性の側面からみると、自閉症および自閉症児者の理解や認識は、自閉症児者が社会生活を営む上で、自分自身にとって、どのような存在で、またどのような影響を及ぼすのかの判断に左右されうると示唆できる。たとえば、自閉症児者が町中で「突然、大きな奇声をあげている」ところを目撃すれば、「怖い」や「異常」という自閉症イメージは高まると予測され、逆に作業や課題をしている時に「もくもくと真剣に取り組む」姿勢を目撃すれば「安全」という自閉症イメージは高まるであろう。このように、自閉症イメージは、自閉症児者の社会生活における振る舞いの善し悪しやその状況を受け取る個人の解釈の仕方によって容易に変化するものであろう。

上記のことから、自閉症児者と実際の交流経験を通して、自分自身に対する負の影響はあまり無いという理解や認識を得ることができるのであれば、自閉症のイメージは良い方向へ変化していくと考えられる。発達障害領域における熟達化の研究の中で、発達障害児者の理解は、発達障害者との交流経験が多いほど、発達障害児者の理解が高まる(河内・斎藤, 2007)とされている。これらの研究結果もふまえると、自閉症のイメージは、自閉症児者との交流経験の違いによって変化するといえよう。

4. まとめ

本研究の目的は、大学生における自閉症のイメージに関する調査を実施し、自閉症は、どのようなイメージとして理解され、どのような構造であるのかを予測することであった。

大学生における自閉症のイメージは、個人的な主観と社会的な関係性の2側面による構造を持つことが予測された。個人的な主観とは、自閉症および自閉症児者に関する各種記述情報に基づく解釈と考えられ、社会的な関係性とは、実際に自閉症児者が地域社会生活の中でどのような振る舞いをして、その振る舞いは自分に対してどのような影響をおよぼすのかに基づいた解釈と考えられた。これらから、大学生の自閉症への認識や理解は、自閉症に関する情報と、自閉症が社会的にどのような存在であるかの2つが相互的に作用していると予測された。

自閉症のイメージは個人の知識に依存する傾向にあり、発達障害に関する情報にふれる機会が多ければ、自閉症のイメージはポジティブな方向へ進むことが示唆された。この結果は、知的障害者や自閉症のイメージに関する研究の中で、障害者と接近する回数が多いほど、イメージがポジティブな方向へ変化する（生川，1995；田実，2007）という結果と同様であった。

本研究においては、大学生における自閉症のイメージ形成について一定の結果が得られたが、これらはいくまでも暫定的な予測にすぎない。今後、イメージを形成する要因について、さらなる詳細な調査と分析が必要であろう。

引用文献

- 1) American Psychiatric Association 1994 Diagnostic criteria from DSM-IV. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳. DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院.
- 2) 生川善雄 1995 精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究 特殊教育学研究 32(4), 14.
- 3) 河内哲也・斎藤恵一 2007 子どもの行動の特異性に対する視点の違い—発達領域における熟達化との関連— 北海道心理学会第54回大会発表論文集.
- 4) 松村孝雄・横川剛毅 2002 知的障害者のイメージとその規定要因 東海大学文学部紀要, 77, 103.
- 5) 日本自閉症協会 2007 一般社会の人たちに対する 3000人アンケート調査 自閉症に対する地域社会の人たちの心のバリアフリー推進事業, 独立行政法人福祉医療機構.
- 6) 大井学 2004 高機能広汎性発達障害をもつ人のコミュニケーション支援—語用障害とその補償— 障害者問題研究, 32(2), 22.
- 7) 田実潔 2007 『購読演習』による自閉症イメージ形成の可能性について—教授法(FD)の観点から— 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 44, 109.
- 8) 高橋和子 1997 高機能自閉症児の会話能力を育てる試み—応答能力から調整能力をめざして— 特殊教育研究, 34(5), 99-108.

執筆者紹介

河内哲也

所属：北海道社会福祉事業団 太陽の園

Email：tetsuya0311@smile.odn.ne.jp

大学生における自閉症の
イメージに関する研究

河内哲也, 齊藤恵一, 河内なぎさ, 伊藤淳一

専門分野：認知心理学, 臨床心理学, 発達障害学

齊藤恵一

所属：北海道医療大学心理科学部

Email：ksaito@hoku-iryu-u.ac.jp

専門分野：言語心理学

河内なぎさ

所属：情緒障害児短期治療施設バウムハウス

Email：nagisa_komitsu@pop16.odn.ne.jp

専門分野：臨床心理学, 児童虐待, 情緒障害学

伊藤淳一

所属：北海道社会福祉事業団 太陽の園

Email：zyunichi.itou@dofukuji.or.jp

専門分野：小児神経学, 臨床発達心理学